

ちいっそ、京都へ

きょうされん理事長・京都支部副支部長 西村直

こんにちは。きょうされん京都支部副支部長の西村（直）です。京都支部役員に西村が3人おり、名前で呼んでいます。私は直（チヨク）さんと呼ばれています。心の癒し処京都、勇気と確信（革新）をお伝えする京都、そして猛暑・灼熱の京都が心からのおもてなしでお待ちしております、全障研第50回記念京都大会にどうぞおこしやす。

■学校づくりの理念を受け継ぐ

全障研のみなさんは「京都」と言えばあの与謝の海養護学校づくり教育権保障の運動と実践がまず浮ぶことでしょう。この教育実践の中心は他の方にゆずるとして、私は「学校づくりは箱づくりではない、民主的な地域づくり」の基本理念にもとづいた与謝の海養護学校づくり運動が卒業後の作業所づくりの運動として与謝峠、観音峠、老ノ坂峠などいくつかの峠をのり越え、京都北端の丹後地域から北風におされるように南の方角に流れてきた、その理念が40年余経過した現在でもまちがいなく受け継がれている一端をご紹介したいと思います。

与謝の海養護学校の開校は1969年、就学免除・猶予を受けた障害児（者）が長い教育権を求める運動の結果手にした教育復権で

した。1979年の養護学校義務制が施行前の開校でした。新入生はすでに学齢期を超え、30歳近くになっていた人も少なくありませんでした。同時に、知的障害のある子どもの養護学校は京都府下（京都市は除く）初の開校でしたので、府下全域から寄宿舎生活を送りながらの「越境」入学もたくさんありました。私の作業所がある亀岡市からも10人近くの方が新設の高等学校から入学しました。

■住民と行政とのタッグ

与謝の海養護学校の開校を喜び合うと同時に



にすでに目の前に迫った「卒業後の場づくり」の課題が浮び上がりました。

丹後では1973年の大宮共同作業所を皮切りに丹後エリア、中丹エリアとほとんどの市町行政区に1カ所の作業所がつくられてきました。特筆すべきはそれが地元行政の所有する土地や建物を親の会など民間の任意団体に貸与する形でスタートだったことです。

この形態は南に広がった作業所づくりでも「京都の常識」として引き継がれていきました（京都市内は少し違います）。これらは明らかに教育権保障運動を介して創られた住民と行政がタッグを組んだ「ねがい」に応える共同事業の継承であり、当時の蛭川知事が提唱した「見えない建設」の証ではなかったかと思っています。

あれから40年！時代は大きく変わりました。事業所の量的拡大は著しいものがあります。一方で財政難を口実にした公費削減、締め付け、地方自治体統制、競争と市場化、自助、共助を振りかざした歪んだ自立論に基づく法改正など、前進面と危険なまでの後退要素が混在する複雑な時代にさしかかっています。

しかし、「見えない建設」は京都府下各地で地域行政と市民が手を組み「地産地消」の事業など地域づくりと重ね合わせた事業として継承されています。（地図参照）

全障研京都大会に参加のみなさん、ぜひこんな京都の作業所づくり運動にも思いを馳せながら熱い京都をお楽しみください。

京都国際会議場で皆様方のおいでをお待ちしています。
（にしむら ただし）